

愛知県立芸術大学
「病院アウトリーチプロジェクト」
2020 年度報告書



2021 年 3 月

愛知県立芸術大学「病院アウトリーチプロジェクト」委員会

目次

ごあいさつ	井上さつき3
「病院アウトリーチプロジェクト」について	井上さつき・安原雅之4
プロジェクト実施体制・協力組織	畑陽子5
筒井会長ご夫妻からのご寄付	井上さつき6
2020 年度事業報告.....	7
1. 2020 年度の「病院アウトリーチプロジェクト」	安原雅之7
2. 2020 年度アウトリーチ実施一覧	石川貴憲・畑陽子8
3. 授業概要	犬飼裕哉・倉橋祐佳里9
4. 東部保育園へのアウトリーチ実施	中村由加里・山本宗由14
振り返り.....	18
1. 「病院アウトリーチプロジェクト」4 年度目の振り返り	三木隆二郎18
2. メンターとしての振り返り	中村由加里・石川貴憲・犬飼裕哉・倉橋祐佳里20
3. 受講生の振り返り.....	23
English Abstract.....	29
1. Artistic Outreach in Hospitals Project	29
2. Project Implementation Structure and Cooperative Organizations.....	30
3. Contribution from Mr. and Mrs. Tsutsui	32
4. Artistic Outreach in Hospitals Project in AY 2020	33
5. List of Artistic Outreach Activities in AY 2020.....	34

ごあいさつ

プロジェクト代表 音楽学部教授 井上さつき

愛知県立芸術大学「病院アウトリーチプロジェクト」の報告書 Vol.4 をお届けします。このプロジェクトは本学の学長特別研究費を得て「試行」という形で 2017 年度からスタートしたのですが、現在は大学の事業のひとつとして、美術学部とも連携を強め、さらに発展した形で実施されています。

この報告書では、2020 年度に実施された「病院アウトリーチプロジェクト」の概要を取りまとめています。詳細はそれぞれのページのとおりですが、コロナ禍のため、病院や福祉施設でのコンサートはすべて中止となり、計画は大幅な変更を強いられました。その中で、演奏動画の制作に取り組むなど、新しい方法を模索した 1 年でした。

資金面では、東海メディカルプロダクツ会長・筒井宣政様と副会長・筒井陽子様ご夫妻から、2017 年度に頂戴した 500 万円のご寄付がプロジェクトの大きな支えになっています。

本学の「病院アウトリーチプロジェクト」は、教育面や芸術面で成果を挙げるだけでなく、地域貢献にも役立っています。コロナ禍での今年の経験を活かし、来年度もさまざまな「場」での色々な形態による実践にチャレンジする予定です。このプロジェクトに対して今後ともみなさまのご支援をいただきたく、よろしく願いいたします。

「病院アウトリーチプロジェクト」について

代表 井上さつき
副代表 安原雅之

このプロジェクトは、芸術を必要としていながらホールや美術館に足を運ぶことが困難な方たちの元へ、芸術家が出向いてアートを届けるアウトリーチ活動のうち、届け先を病院や福祉施設に絞って実践するもので、本学の大学院在學生（音楽・美術）を対象に、病院等における良質な芸術活動に関わるアーティストを育成します。

そのために2017年度、大学院音楽研究科「アートマネジメント」の授業を拡充し（美術研究科は「プロジェクト研究」として開講）、新たに病院等における芸術活動に特化した講座を開設しました。受講生は、前期は子供向け、後期は病院に特化したアウトリーチに関して理論と実習を通じてノウハウを学ぶことにより、「自ら企画し、実施できる」スキルを身に付けます。

その場に集う人に心の癒しを与え、病院や福祉施設にとっては環境の向上になり、芸術家にとっては社会経験の場となり、本学にとっては地域貢献と卒業生のキャリア育成支援となります。

医療や福祉の現場における芸術活動は、必要性は認識されながらもいまだにノウハウが確立していませんが、本学でそれに関わる芸術家が育成されることにより、愛知県はもとより、日本全体にとって大きな成果が生まれることが期待されます。

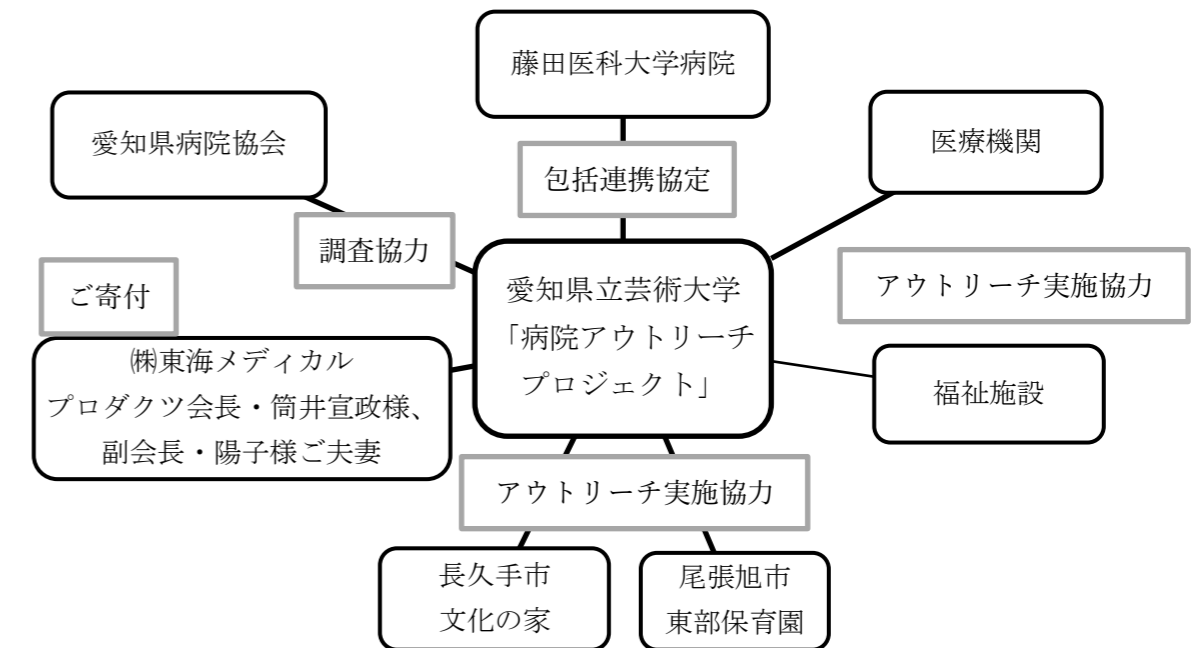
（追記）

2020年に入ってからコロナ禍のため、病院や福祉施設に実際に演奏を届けるアウトリーチ活動はすべて中止せざるを得ませんでした。私たちはその中で、演奏動画を作成するなど、新しい領域を開拓しましたが、後期に入って、保育園でのミニコンサートが実現したときに、生演奏を伴うアウトリーチ活動の素晴らしさを改めて実感しました。こうした経験を2021年度以降の取組みに活かしていきたいと考えています。

プロジェクト実施体制・協力組織

畑陽子

このプロジェクトは、アウトリーチを行うアーティストの育成、医療機関をはじめとした実施先における芸術活動に関する調査・研究を行うとともに、芸術による地域貢献も射程に入れた活動です。プロジェクトの実施にあたっては、昨年度に引き続き、藤田医科大学病院、株式会社東海メディカルプロダクツ会長・筒井宣政様、副会長・陽子様ご夫妻、長久手市文化の家をはじめ、地域の医療機関、福祉施設、文化施設等から多大なご支援・協力をいただきました。以下に、簡潔にその体制を示します。



2020年度プロジェクトメンバー

代表 井上さつき（本学教授・音楽学）
副代表 安原雅之（本学教授・音楽学）
スーパーバイザー 三木隆二郎（本学非常勤講師・アートマネジメント実務）
アドバイザー 佐藤直樹（本学美術学部准教授・デザイン）
アドバイザー 村瀬 香（本学非常勤講師・音楽療法）
コーディネーター 中村由加里（本学卒業生・クラリネット奏者）、石川貴憲（本学卒業生・サクソフォン奏者）、犬飼裕哉（本学卒業生・ピアノ奏者）、倉橋祐佳里（本学卒業生・ピアノ奏者）
事務局 七條めぐみ（本学非常勤講師・音楽学）、畑陽子（本学卒業生・音楽学）、山本宗由（本学大学院博士後期課程・音楽学）

筒井会長ご夫妻からのご寄付

井上さつき

株式会社東海メディカルプロダクツ会長・筒井宣政様、副会長・陽子様ご夫妻には、愛知県立芸術大学病院アウトリーチプロジェクトの趣旨にご賛同いただき、2017年度に500万円のご寄付を頂戴しました。ここに厚く御礼申し上げます。

この資金は例年、院内コンサートをはじめとするアウトリーチ活動の演奏者謝金・交通費、楽器・機材運搬費、チラシ等の作成費などの運営費に活用させていただいています。

副会長の筒井陽子様からは、長い入院生活を送られた次女、佳美様に付き添っていらしたご経験から、病院アウトリーチは立派なコンサートを開くことが重要なのではなく、必要とされる方にどこまで寄り添った演奏ができるかが大事であるという貴重なご助言をいただきました。

今年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、対面での病院コンサートを実施することはできませんでしたが、配信用の演奏動画制作や保育園でのアウトリーチ活動を通じて、学生たちの中に、確実に「聴き手に寄り添う」という感覚が芽生えました。

今後も状況に合わせて、多様な形態の活動を実施していきたいと考えています。

病院アウトリーチプロジェクトは、
株東海メディカルプロダクツ会長
筒井宣政様、陽子様ご夫妻から
ご支援を頂いています。



アウトリーチコンサートの際に掲示するパネル

2020年度事業報告

1. 2020年度の「病院アウトリーチプロジェクト」

安原雅之

2020年度、病院アウトリーチプロジェクトの活動もまた、一変しました。

昨年度末、2020年2月と3月に予定されていたアウトリーチの実践が中止になったのは、一連のできごとのはじまりで、4月以降、年間を通じて、本プロジェクトの核となる、病院を訪問して音楽をお届けするという活動の実践は一度もできませんでした。

2020年度4月のはじめ、愛知県立芸術大学では入学式も中止となり、さらに授業も1ヶ月も遅れて、5月の連休後に、オンラインによる遠隔授業のみで開講となりました。病院アウトリーチプロジェクトと連動している授業も、Zoomを使った遠隔授業として始まりました。それは学生にとっても教員にとっても全く初めての経験で、最初は戸惑うことも多々ありましたが、慣れてくると、オンラインの授業の可能性も感じられるようになりました。

しかし、どのようにアウトリーチを実践できるか、という点が大きな課題となり、動画による配信で音楽をお届けする、という考えに至りました。ほとんどの学生に動画作成の経験はありませんでした。そこで、授業で動画制作の方法を学べるよう、急遽、授業内容を変更し、講師をお招きして作成方法を学び、演奏の動画を試作しました。

9月末に後期が始まる頃には、世の中の状況も少し変化していました。後期には、授業も一部対面で行うようになり、また、例年は前期に行っていた保育園でのアウトリーチ実践が実施可能となり、12月には3つの学生によるグループが、保育園を訪問して演奏することができました。それは、聴衆が目の前にいて演奏できることの喜びと、演奏者と聴衆のあいだの音楽を通したコミュニケーションの意義をあらためて実感する、貴重な経験となりました。

2021年にはいつてからは、本格的な動画制作に取り組みました。本プロジェクトのこれまでのアウトリーチの訪問先である藤田医科大学病院は、コロナ対策の最前線を行く医療機関であり、いつアウトリーチが再開できるか、現時点ではわかりません。私たちは、早急に私たちの音楽を動画としてお届けすべく、制作を進めています。

コロナ禍で明け暮れた一年間でしたが、学ぶことも多く、今年度の経験は今後の活動に活かしていきたいと思えます。

2. 2020 年度アウトリーチ実施一覧

石川貴憲・畑陽子

2020 年度アウトリーチ実施一覧

通算公演回数	実施日	会場名 企画名	対象者 出演者〔注1〕	公演時間 (分)	参加者 (人)	スタッフ (人) 〔注2〕
1	12月9日	東部保育園（尾張旭市）	園児、保育士	15	24	2
2		音楽を通じて園児と触れ合う（乳児、年少、年中、年長の4公演）	岩橋有佳（ピアノ）、中村まり（フルート）、米山義則（お話）	15	20	
3				15	28	
4				15	25	
5	12月23日	東部保育園（尾張旭市）	園児、保育士	20	24	3
6		いろんな国の音楽に楽しく親んでもらう（乳児、年少、年中、年長の4公演）	本間ちひろ（ヴィオラ）、渡辺理紗子（ピアノ）、畑陽子*（ダンス）	20	20	
7				20	28	
8				20	25	
9	12月24日	東部保育園（尾張旭市）	園児、保育士	15	24	2
10		楽器の音を楽しんで聴いてもらう（乳児、年少、年中、年長の4公演）	谷川みなみ（ピアノ、鍵盤ハーモニカ）、西前葉々子（クラリネット）	15	20	
11				15	28	
12				15	25	
合計					291	

※2021年2月18日現在

〔注1〕 下線は今年度の受講生。*は本プロジェクトスタッフ。

〔注2〕 スタッフの人数は「病院アウトリーチプロジェクト」関係者のみ計上し、保育園関係は含まれない。

名城病院、白山リハビリテーション病院とのやりとり

新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点において危機感を一番に感じているのは医療現場であり、どの病院においてもいち早く対策が取られた。最も配慮がされていた時期は家族の面会も禁止されており、外部の業者以外は病院ボランティアも院内に入れない状況が続いていた。また、いずれの病院からも、このような時だからこそ芸術の力で人を勇気づけて欲しいと励ましをいただいた。例年の対面の演奏会は開催できなかったが、この状況が落ち着きを迎えた際には改めて共同で演奏会を企画したいとやりとりしている。（石川貴憲）

3. 授業概要

犬飼裕哉・倉橋祐佳里

2020年度の授業では、新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、例年授業の軸として開催してきた前期の保育園へのアウトリーチ、後期の病院へのアウトリーチが共に実施不可能となったため、授業計画を急遽大幅に変更せざるを得ない状況となった。

前期の授業では、感染症対策の観点から Zoom によるオンライン参加と対面参加を併用しつつ、演奏動画コンテンツによってアウトリーチコンサートを届けるというコンセプトでの動画制作企画を行った。また、動画制作にあたって例年とは異なるゲスト講師を招き講座を開催した。後期は、前期に引き続き動画制作プロジェクトを進めていたところ、状況がやや改善して、対面での保育園アウトリーチコンサートが開催可能になったため、短い期間で急遽準備を進め、実施することができた。

本稿では、今年度の授業内容一覧を掲載し、ゲスト講師による講座の内容をまとめる。

前期

受講生：作曲2名、音楽学1名、ピアノ2名、弦楽器4名、管楽器3名

メンター（本プロジェクトコーディネーター）：中村由加里、石川貴憲、犬飼裕哉、倉橋祐佳里

前期の授業内容と講師

	日付	授業形態	講座名・内容・講師名
第1回	5月13日	オンライン	ガイダンス
第2回	5月20日	オンライン	「アウトリーチとはじめ」三木隆二郎（本プロジェクト・スーパーバイザー）
第3回	5月27日	オンライン	「病院アウトリーチプロジェクトのこれまでの歩み」安原雅之（本プロジェクト・副代表）
第4回	6月3日	オンライン	学生課題発表「病院向けの演奏動画の企画」
第5回	6月10日	オンライン・対面	リモート演奏動画についての情報共有、事例紹介、鑑賞
第6回	6月17日	オンライン・対面	学生課題発表「NPOトリトン・アーツ・ネットワーク2018事業報告書 評価事業報告書を読んで」三木隆二郎（本プロジェクト・スーパーバイザー）
第7回	6月24日	オンライン・対面	「リモート演奏動画作成の実演」ゲスト講師：日菜一真（サウンドアーティスト、名古屋芸術大学非常勤講師）
第8回	7月1日	オンライン・対面	演奏動画制作企画のグループに分かれてディスカッション
第9回	7月8日	オンライン・対面	演奏動画制作企画のグループディスカッションと進捗報告
第10回	7月15日	オンライン・対面	「アウトリーチの経験談」ゲスト講師：沼田園子（ヴァイオリニスト、愛知県立芸術大学音楽学部非常勤講師）
第11回	7月22日	オンライン・対面	「コロナ禍における近況・動画制作の経験談」ゲスト講師：中村洋乃理（NHK交響楽団次席ヴァイオラ奏者）
第12回	7月29日	対面	動画制作企画のレコーディング・撮影
第13回	8月5日	オンライン・対面	制作した動画の観賞・講評会

後期

受講生：作曲2名、音楽学1名、ピアノ1名、弦楽器1名、管楽器2名

メンター（本プロジェクトコーディネーター）：中村由加里、石川貴憲、犬飼裕哉、倉橋祐佳里

後期の授業内容と講師

	日付	授業形態	講座名・内容・講師名
第1回	9月30日	対面	前期に制作した動画の振り返りと講評会。ゲスト講師：日栄一真（サウンドアーティスト、名古屋芸術大学非常勤講師）
第2回	10月7日	対面	後期授業の計画ディスカッション。動画の作成方針の決定
第3回	10月14日	対面	「感情推定について」ゲスト講師：神谷幸弘（愛知県立大学情報科学部准教授）
第4回	10月21日	オンライン・対面	「藤田医科大学について」ゲスト講師：石原慎（藤田医科大学医学部教授）
第5回	11月4日	対面	保育園アウトリーチ企画開始。過去の実演のビデオ鑑賞、企画ディスカッション
第6回	11月11日	対面	東部保育園アウトリーチ（12/9,12/23,12/24実施）の企画会議
第7回	11月18日	対面	東部保育園アウトリーチ（12/9,12/23,12/24実施）の企画会議
第8回	11月25日	対面	東部保育園アウトリーチ（12/9,12/23,12/24実施）の企画会議
第9回	12月2日	対面	東部保育園アウトリーチ（12/9実施）のランスルー
第10回	12月9日	対面	東部保育園アウトリーチ（12/23,12/24実施）のランスルー
第11回	1月6日	対面	東部保育園アウトリーチの振り返り
第12回	1月13日	対面	動画制作プロジェクト開始
第13回	1月20日	対面	動画制作企画ディスカッション
第14回	1月27日	対面	動画制作企画ディスカッション
第15回	2月3日	対面	動画制作企画ディスカッション
第16回	2月10日 2月16日	対面	動画制作レコーディング、撮影

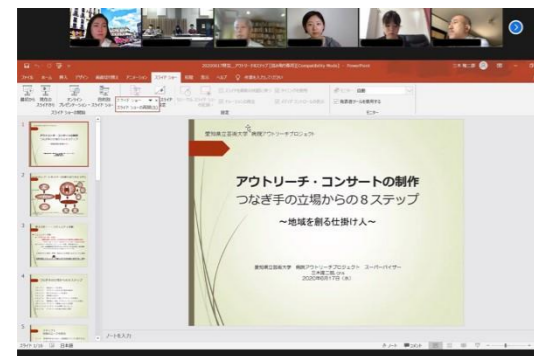
授業の様子（一部抜粋）



2020年5月27日

講義担当：安原雅之教授

内容：病院アウトリーチプロジェクトのこれまでの歩み



2020年6月17日

講義担当：三木隆二郎先生

内容：学生課題発表「NPO トリトン・アーツ・ネットワーク 2018 事業報告書 評価事業報告書を読んで」



2020年6月24日

ゲスト講師：日栄一真先生（サウンドアーティスト、名古屋芸術大学非常勤講師）

内容：リモート演奏動画作成の実演

動画制作に向けて、演奏動画の作成について講義していただいた。演奏の録音、映像の撮影をメンターによる実演とともに行い、撮影した音源と映像の編集についてその場で実演を交えながら教えていただいた。



2020年7月15日

ゲスト講師：沼田園子先生（ヴァイオリニスト、愛知県立芸術大学音楽学部非常勤講師）

内容：アウトリーチの経験談

これまでのご自身のアウトリーチ経験を踏まえ、演奏者という立場からみたアウトリーチについて講義していただいた。事前準備や心構え、選曲についてや、これまで患者さんと接した際感じたことなどをお話しいただいた。



2020年7月22日

ゲスト講師：中村洋乃理先生（NHK 交響楽団次席ヴィオラ奏者）

内容：コロナ禍における近況・動画制作の経験談

コロナ禍において、第一線で活躍する演奏家の生活や考えにどのような変化があったのか、また、SNSで配信している動画についてお話しいただいた。その後学生の動画制作の企画にアドバイスをいただいた。



2020年7月29日

内容：動画制作のレコーディング・撮影

換気、パーティションの設置など、感染症の対策に細心の注意を払いながら前期の動画プロジェクト用の本格的なレコーディングを行った。プロジェクトのために最低限の録音機材を急速揃え、録音、撮影は主にメンターや大学職員のサポートのもと行われた。



2020年10月14日

ゲスト講師：神谷幸弘先生（愛知県立大学情報科学部准教授）

内容：非接触センサーによる感情推定について

人の感情の変化を、AI技術によって推定する試みについてお話しいただいた。非接触センサーによって明らかになると思われる、人の心への音楽の影響、特に「生演奏による」音楽の影響は、本プロジェクトにおける活動の意義の裏付けとなる期待が持たれる。



2020年10月21日

ゲスト講師：石原慎先生（藤田医科大学医学部教授）

内容：藤田医科大学病院について

病院アウトリーチコンサートを企画するにあたって、実施先の病院について理解を深めるために例年行われる授業。病院の概要、特に重要な理念としている病院のホスピタリティについてお話しいただいた。



2020年12月9日

内容：保育園アウトリーチのランスルー

12月に行われる保育園でのアウトリーチに向けて各グループがそれぞれ企画したプログラムのランスルーを行い、受講生と教職員、メンターでフィードバックを行った。



2020年1月6日

内容：保育園アウトリーチの振り返り

12月に行われた保育園でのアウトリーチの各回の記録動画を鑑賞し、受講生と教職員、メンターでフィードバックを行った。

4. 東部保育園へのアウトリーチ実施

中村由加里・山本宗由

本プロジェクトでは、毎年度において尾張旭市立東部保育園でのアウトリーチを行っている。2020 年度のアウトリーチは、受講生を 3 チームに分け、12 月 9 日、12 月 23 日、12 月 24 日の計 3 日にわたり実施した。

① A チーム

日時 2020 年 12 月 9 日 (水)
10:00～10:15、10:25～10:40、10:50～11:15、11:15～11:30
(4 回公演)

ねらい 音楽を通じて園児と触れ合う

出演者 岩橋有佳 (ピアノ)、中村まり (フルート)、米山義則 (お話)

演奏曲 P.I. チャイコフスキー：《くるみ割り人形》より、〈中国の踊り〉

G. フォーレ：シチリアーナ

A. アイゼンバーグ：アーキシヨリーニョ

メンター 犬飼裕哉

評価者 井上さつき、犬飼裕哉

評価者所感 子供達の年齢に合わせて話すスピードや内容を変えていて、上手にコミュニケーションが取れていた。世界地図を使った説明も効果的だった。シチリアーナの演奏で、子どもが静かに落ち着いて聴き入る様子が見られ、生の演奏がもたらす力を感じた。



② B チーム

日時 2020 年 12 月 23 日 (水)
10:00～10:20、10:25～10:45、10:55～11:05、11:10～11:30
(4 回公演)

ねらい いろんな国の音楽に楽しく親しんでもらう

出演者 本間ちひろ (ヴィオラ)、渡辺理紗子 (ピアノ)、畑陽子 (ダンス)

演奏曲 L. デンツァ：フニクリ・フニクラ

E. サティ：ピカデリー

R. シューマン：おとぎの絵本

A. ベンジャミン：ジャマイカン・ルンバ

メンター 石川貴憲、中村由加里

評価者 安原雅之、石川貴憲、中村由加里

評価者所感 園児が食育について学んだばかりだという事前情報をもとに、食と国と音楽を繋げた構成は評価すべき点である。また、手作りのパペットを用いた演出や、ダンスによる演出は視覚的効果も大きく、子供達の興味を惹きつけていた。ピアノ、ヴィオラ、パペット、ダンスと情報量が多いように思われたが、バランスよくまとまっていた。



③ C チーム

日時 2020 年 12 月 24 日 (木)
10:00～10:15、10:25～10:40、10:50～11:05、11:15～11:30
(4 回公演)

ねらい 楽器の音を楽しんで聴いてもらう

出演者 谷川みなみ (ピアノ、鍵盤ハーモニカ)、西前菜々子 (クラリネット)

演奏曲 彼方の光

おもちゃのチャチャチャ

A. シュライナー：インマークライナー

A. ピアソラ：リベルタンゴ

メンター 倉橋祐佳里

評価者 安原雅之、倉橋祐佳里

評価者所感 演奏者2人の溢れんばかりの個性と、コミュニケーション能力の高さにより、その場にいる全員が楽しめる空間が作られた。クラリネットを分解しながらの演奏は子ども達を驚かせ、楽器への興味をかき立てた。最後には子どもから「すごい」と声があがるほど、演奏能力も高かった。



全体所感 今年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、保育園でのアウトリーチが受講生にとって初めての対面でのアウトリーチであった。事前の打ち合わせで園児と触れ合うことはできなかったが、先生から普段の園内の様子を伺うことで対象者理解を深めた。企画段階では、昨年度の受講生を中心に、園児に何をどう伝えるのかを話し合い、各チームがそれぞれ工夫を凝らした。本番では、どのチームも対象の学年ごとに話す速度や目線、内容を合わせ、園児とのやりとりを楽しんでいる様子が見受けられた。自分達の演奏に対する子どもの直の反応を目にすることは、座学での知識だけでは埋められない貴重な経験であり、受講生の大きな財産となった。(中村由加里)

東部保育園 杉浦千晶先生(園長)のコメント

素敵なお縁を頂き、今回も素晴らしい演奏を聴かせて頂きました。今年で4年目になる「愛知県立芸術大学のアウトリーチ」は東部保育園の中でも定着した行事になっています。

乳幼児期に経験したすべてのことは、その後の人生において、何一つ無駄になることはありません。幼い頃に歌った歌、聴いた音楽、読んだ絵本……。すべてが今ある「私」の一部になっています。「アウトリーチ」を通して触れている音楽も、子どもたちの大きな心の糧となっていきます。

巷には「音」が溢れていますが、本当に触れさせたい「音楽」は意外と少なかったりします。大人以上に豊かな感受性を持っているこの時期の子どもたちに、洗練された音

楽を生演奏で聴く機会を頂いていることは得難い経験として子どもたちの心に残ることでしょう。

「来年はどんな音楽と出会えるのだろう」と今からワクワクしています。ありがとうございました。

振り返り

1. 「病院アウトリーチプロジェクト」4年度目の振り返り

スーパーバイザー 三木隆二郎

1. 研究

2017年度より始められた当プロジェクトでは、「良質な病院アウトリーチ」を普及させるために、愛知県内の保育園でのアウトリーチ体験をした後、病院や福祉施設で院生による実践を毎年、積み重ねてきた。しかし4年目に入った2020年度はコロナ禍のため、オンライン動画でどのように病院患者および医療従事者に音楽をお届けするか、がテーマになるという思わぬ展開となった。

特に上半期の前半は緊急事態宣言(愛知県は4月16日から5月14日まで)のために外出して人に会うことが出来なくなり、すべてオンライン授業となった。が、当初よりオンライン動画を作る方針で授業に臨んだため、AからDまでの4チームに分けて、誰に届けるのか対象をよく絞り込んだ上で、すぐに動画制作に入り、映像と録音の技術的なアドバイスは外部講師を急遽、招くことによって、なんとか8月5日には4本の試作動画を完成させることが出来た。

下半期も、保育園での対面のアウトリーチ体験は出来たものの、コロナ禍の第3波のために不自由な状況は続いた。その中で上半期の制作動画の試作品に、当大学の制作を示すサウンド・ロゴや大学名を明記したほか、下半期で新たに取り組んだ3つの動画を完成させることが出来た。

また愛知県立大学神谷幸宏准教授の非接触型センサーによって呼吸から反応を探る研究成果の授業は、病院患者のように反応を確認することが難しい聴き手が生演奏を快く思っているかどうかを探るエビデンス収集に役立つ可能性があるという意味で、大変興味深い研究であり、当プロジェクトでも今後、協力していきたい。

2. 教育

オンライン授業では今期の最初に、音楽アウトリーチの先駆的な活動を続けている東京のアートNPOトリトン・アーツ・ネットワーク(TAN)が出版した『TANアウトリーチハンドブック』掲載の「第一線音楽家インタビューを読んだ感想と気づき」を学習し、「アウトリーチは自分が何の為に演奏するか教えてくれる」とか「自己中心ではダメ」、「アウトリーチはコミュニケーションする場だ」という学びがあった。

次いで『2018TAN事業報告書』を使って直近のTANのアウトリーチの実践事例から各自が関心を持つものを選び出し、自分なりのアウトリーチ作りのヒントを得た。

その後、外部講師として緊急事態宣言でプロのオーケストラ・プレーヤー(NHK交響楽団)として活動休止に追い込まれる中、全国のヴィオラ奏者に呼びかけて遠隔演奏

動画制作を積極的に行っている中村洋乃理さん(本学卒業生)や、コロナ禍の中でも熱海市の病院で実際にPCR検査を受けた上で対面のアウトリーチを7月に行った沼田園子さん(本学非常勤講師・ヴァイオリン奏者)から、アウトリーチ体験談を聞くことが出来た。

3. 地域貢献

今年は上半期に出来なかった保育園アウトリーチが下期に実施されたが、毎年行っていることで園児の反応がとてもよく、奏者を助けていた。過去の事例が積み重なってきて、3回の内容はそれぞれ充実したものとなっていた。

病院アウトリーチの代替としての動画は、病院患者や医療関係者向け、と対象を絞って制作されたがそこで浮かび上がった成果、意義と課題をまとめる。

【成果】

- ・小児科患者、高齢者など対象別に異なる聴き手によく配慮した動画を4本制作した
- ・演奏だけでなく作曲科受講生による編曲も含め、音楽的に水準の高いものとなった
- ・収録はスタジオで出来たので、キャンパスの緑を背景とし映像としても美しかった

【意義】

- ・面会禁止で孤独感にさいなまれる患者・施設利用者に社会との接点を与える
- ・病院・施設の中で真の芸術との出会いにより、患者・施設利用者が感情を取り戻す
- ・気が抜けず疲弊する医療従事者に音楽で寄添うことにより労働環境を改善する

【課題】

- ・音楽を専門として勉強してきた院生にはいきなりの動画制作で戸惑いがあった
- ・動画を仕上げる為の編集作業など、技術の分かる特定のメンバーに、負荷が偏った
- ・受け入れる病院でどのように病院患者および医療従事者に見せるか手探りだった

4. 来年度の課題

2018年度から採用したメンターによる集団指導体制は今年度も有効であった。動画制作という全く未知の領域で手がかりがないかと思われた際に、メンターの伝手で外部から動画制作プロの講師が授業に来てくれた時は、暗闇に光明を見いだせた感があった。

コロナ禍はまだ暫く続くものとみられるが、今年度、積極的に活用したオンライン授業によって、むしろ東京に居ても毎回の授業に参加できたという面もあった。来年度も動画配信によるアウトリーチ活動は続くと思われるが、愛知県立大学の神谷准教授らによる非接触センサーによる聴き手の反応を調べる試みを「なぜ病院で生演奏が必要か」に対するエビデンス収集につなげていきたい。

振り返り

2. メンターとしての振り返り

中村由加里・石川貴憲・犬飼裕哉・倉橋祐佳里

今年度は、アウトリーチは対面で実施することに意味があるという概念を持ちつつ、多くの制約の中で、プロジェクトとして出来ることを模索し、検討することを繰り返した。

受講生はアウトリーチへの関心が高く、熱心に授業に取り組んだ。前期の動画制作では対象者をチームごとに設定し、それに合わせて曲や構成を工夫した。初めての撮影や編集作業にも挑戦し、試行錯誤しながらも各チームそれぞれ内容の濃い動画を作り上げた。後期の保育園でのアウトリーチでは、どのチームも子供たちと一緒に楽しんでいる姿が印象的であった。初めてのアウトリーチは緊張してうまく話せなかったり、思うように空気が作れなかったりするものだが、今年度はどのチームも自然体で、子ども達とのコミュニケーションを大切にしている様子が見受けられ、理想的なアウトリーチだと感じた。昨年から継続して受講した学生からは、授業を通して多くのことを学び、自身の成長を感じることができた、と嬉しい声があがった。

色々ともどかしい年であったが、このような状況だからこそ音楽やアウトリーチの意義を深く考え、生演奏の力を改めて実感した一年であった。今後もいつ起こるか分からない不測の事態のために、自身で問題提起し、その解決に音楽がどのように関わることが出来るのかを考える力が必要だと考える。(中村由加里)

新型コロナウイルス感染症の流行の影響により、全てのアーティストが自身の表現を自問する一年となった。

プロジェクトでは学びの在り方を模索しながら、従来の対面中心の企画作りから動画作成の実践が中心となった。演奏者同士もリモートなど限られた条件の中で、対象者に向けてそれぞれの専門性をどのように発揮し届けることができるかアイデアを絞った。また撮影、編集の技術面でも講師からアドバイスを受け、新しい分野へも取り組んだ。

後期には対面での実践が、制限つきながら復活し、保育園での演奏会が可能となった。現地での打ち合わせも行え、明確な対象を想定することができた実践はフィードバックの学びも多く、充実したものとなった。

表現の価値観が大きく動いている中、オンラインと対面演奏の双方を体験することで、音楽表現におけるコミュニケーションの在り方を考えることのできる一年となった。(石川貴憲)

昨年度後期に実施予定だった病院アウトリーチコンサートが新型コロナウイルス感染症の流行によって中止になってから、その影響は年度を跨いでもなお収束することはなく、「今年はどうな学生たちが来てどんなアウトリーチコンサートを作って行けるのだろうか」という期待に胸を躍らせる間もなく、アウトリーチコンサートが開催不可能だろうという事実が立ちはだかった。そんな状況下でもフレッシュな受講生たちが集まってくれて、誰のために何ができるのかということをはたすら考えなければならぬ一年だった。生のアウトリーチコンサートの代替プロジェクトとして行った動画制作は、そもそもアウトリーチがなんたるかをまだ経験していない学生たちにとって、それを補うために相当なイメージーションを強いられるのではないかと心配していた。ところが、コロナ禍を等しく経験している彼らから発せられる言葉には芯があり、想像を遥かに超えて「誰かに寄り添った言葉」だったことに驚いた。

今年度何よりも良かったのは、12月に保育園アウトリーチを開催できたことである。子どもたちに対面で演奏し、生のコミュニケーションを終えた彼らが、まるで生まれ変わったかのように生き活きと輝いた眼差しで感想を語る姿は忘れることがないだろう。意思疎通のしづらいオンライン授業や、リモート演奏動画制作に向き合ったから後だからこそ、関わった誰しもが「やはり音楽は生なんだ」と噛み締める体験となった。(犬飼裕哉)

今年度は受講生が多く専攻楽器の種類も多岐にわたり、また受講生は最初の企画の段階から対象者を意識したプログラム制作ができていた。大学全体としてアウトリーチに対する意識が年を追うごとに高まっており、本授業が開講されていることの意義を強く感じる。これまで芸術大学では卒業後の活動についての支援や指導があまりされないと言われてきたが、最近卒業後の活動を見据えた取り組みが多く行われ、本授業もその中の一つであると感じる。学生たちは院生のうちから外部と関わりを持って仕事をし、受講生は特に社会との関わりを意識していることが授業内外のやり取りからもうかがえる。

今年度は新型コロナウイルスの感染拡大により、継続して行ってきた藤田医科大学病院でのパサージュコンサートなどの実践を行うことができなかつたため、前期は動画での演奏提供を考える機会となった。SNS に対する意識や機械に対する理解には個人差があったものの、「何かをしなければいけない」という意識は共通であったと思う。動画作成では慣れないことが多く、全員が手探りだったが、本プロジェクトの関係者が丸となって動画を作成した。

後期の保育園での実践が初めての対面でのアウトリーチとなったが、受講生は生き生きと演奏しており、聴衆にとっても演奏者にとっても対面でコミュニケーションを取り

ながら演奏することが重要であると感じた。

アウトリーチについて考えることは、技芸向上のため努力することと別物ではないと感じる。受講生が自分の音楽と向き合い、自分のポリシー、アイデンティティ、目指す音楽、将来のことを深く考えるきっかけとなることを願っている。(倉橋祐佳里)

振り返り

3. 受講生の振り返り

2020年度は12名の大学院生が「アートマネジメント」の授業を受講した(前期のみの履修も含む)。以下に、受講生からの振り返りコメントを掲載する。

私は二年間続けてアートマネジメントの授業を履修したことで、充実した内容のアウトリーチ活動を行うためには、訪問先の相手の方や、一緒に活動する音楽家の仲間とより深く、そして継続的にコミュニケーションを取ることが大切だと学びました。昨年度に続けて二度目の訪問となった東部保育園では、園長先生には前回の活動のことをよく覚えていただいていたこともあり、打ち合わせやアウトリーチの実施、そして実施後の感想会まで非常にスムーズに行うことができました。私たち音楽家は同じ訪問先に伺うことで、現地の様子や雰囲気をよく知ることができ、現地の方にも活動を繰り返すことによって、私たちがどんな人柄や感性を持った音楽家なのかを知ってもらうことができ、そのコミュニケーションの繰り返しによって、より綿密に連携が取れたアウトリーチ活動が行えるようになっていくのだと分かりました。自由に人と会うことが難しくなった昨今の情勢ではありますが、これからもアウトリーチやアウトリーチに類する活動に、少しでも多く関わりを持てるようになれば良いなと思います。(作曲領域2年 谷川みなみ)

今年は、音楽業界に限らず、様々な業種で大きな変化を強いられる年となりました。前期で動画作成を試みて、完成した時は1つの達成感がありましたが、後期での保育園実習を試みて、やはり音楽は遠隔では伝えきれないものが存在する事を実感しました。アウトリーチの魅力は、演奏者と聴衆が同じ空間で音楽を共有する事で、その時の空気感や表情、思いなどをお互いに感じられる事だと思います。一方で、動画の場合は、いつでもどこでも自由に聴く事ができるので、より幅広い方々に音楽を身近に感じて貰えるきっかけになると思います。聴衆に合わせたプログラムやMCを考えるように、動画作成においても対象者の視点に立って工夫を凝らし、今後様々な方に試聴して頂いて、どういうものが楽しんで試聴して頂けるか、コンサートのように回数を重ねていくと、きっと何かが見えてくると思います。これからもこの授業によって音楽の可能性が広がる事を祈っております。(鍵盤楽器領域2年 渡辺理紗子)

この1年間演奏する機会が減り、本来のアウトリーチの醍醐味である生演奏が思うようにできませんでした。特にマスクを付けて演奏できない管楽器にとっては、とても厳しい状況でした。そんな中、前期の授業で動画を作成することになり、「演奏を届ける」方法は今の世の中、工夫次第で多くのやり方がある、と感じました。私のグループでは演奏と自然の映像を組み合わせた動画を作成しました。編集はメンターの方がやってくさいましたが、想像以上に大変で様々なノウハウが必要でした。また演奏だけではなく、どう見せるかという面もとても重要になります。やってみないとわからないことが増えてきているので、これからの時代に上手に対応していきたいです。(管楽器領域2年 満吉香苗)

「アウトリーチ」という活動は授業を受講する前から自己流で行っていたのですが、それを行うまでの過程に関しては無知のまま挑んでしまっていました。その無知の部分を、授業を通して学ぶことができ、最後には保育園にて実践もさせていただいて、とても深い学びとなりました。どのような対象者に向けて、音楽を通してどのようなことを伝えたいのか。土台となる部分がしっかり自分の中で決まっていなくて、アウトリーチをする側も、アウトリーチを受ける側も、どちらにとっても素敵なアウトリーチとはならないことを知りました。今年度の授業は新型コロナウイルス感染症の影響で、今までの授業とは違った形だったと思いますが、私自身はとても学びや新しい発見のあった授業だと感じました。前期には、音楽界の中でも流行したリモート演奏や動画配信に特化をして、動画編集や収録など、初めてのことを沢山経験しました。今回得た動画編集などに関する知識は今後も活かしていきたいと思います。

後期は、保育園へのアウトリーチ実践を無事に行うことができ、本当に幸せな気持ちでいっぱいでした。実際に園児の皆さんを目の前にしてみるとキラキラとした表情で、私たちの作り上げる音楽や世界観に一生懸命ついて行こうとしてくれる姿勢や、楽器に興味津々な姿など、たくさんの反応を見ることができました。実践することで身をもって感じるが多かったです。改めて、アウトリーチという活動の楽しさを知りました。

今後もアウトリーチ活動を積極的に実践し、授業で学んだことと関連付けて、活動を続けていきたいと思います。(管楽器領域2年 西前菜々子)

私はこの授業を受ける前、アウトリーチというのは、患者さんや園児の皆さんに寄り添った、聴き馴染みのある音楽を演奏することが主であると思っていました。しかし、先生方やメンターの皆さんのアドバイスを受け、自分たちの演奏する音楽で聴き手に何を伝えたいのかを考えることが大切だということ学びました。

今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響でアウトリーチ活動が制限されましたが、このような状況の中、12月に保育園で実践をさせていただけたことは、私自身とても貴重な経験になりました。実践中、園児たちが曲ごとにそれぞれ違った反応を見せたり、少し落ち着きのなかった子ども、音楽が始まったら静かに聴いたりしている姿に、音楽の力は素晴らしいなと改めて実感することができました。この実践から多くのことを学ぶことができ、とても嬉しく思います。(作曲領域1年 岩橋有佳)

社会人で大学院からの入学で何十年ぶりの授業、楽器の演奏ができないという自分自身の立ち位置、そして新型コロナウイルス感染症の影響で授業開始が遅れ、オンライン授業になったといった外的要因などもあり、「一年間のカリキュラムの中で今日の授業はどのような位置づけなのか」が当初はつかめず、受動的に受けていたというのが現実でした。グループ分けをして動画を作る頃になって、ようやく少しずつ「見えて」きたような気がします。

普段から「音楽を誰かに届ける」ことに自覚的で、それが「身体」でわかっている演奏系の皆さんと、「届けるとは？」をこれから「頭」で考える自分との開きが大きい中で、コロナ禍のおかげで(と敢えて言いますが)、「音楽をする意味」を否応なく考えさせられました。発明や創意工夫が何かしらの「不自由」から生まれるように、「届けたくても届けられない」というもどかしさが、「自分たちに何ができるか」を考えさせたように思います。もし新型コロナウイルス感染症の流行がなければ動画を作ろうという発想はなかったでしょう。動画も作ってみたからこそ、その対立軸としての「生演奏」で子どもたちに接したときの、彼らの正直で鋭い感受性に対して、一層新鮮な驚きも経験できたと感じます。病院アウトリーチを経験してみると、きっとまた違う発見があるのでしょね。いずれにせよ、受講生すべてとグループを組みたいと思わせてくれる素敵なメンバーばかりでした。それだけに、後期は受講生が減ったのは残念でした。時間割の都合上、致し方のないことなのでしょうが。また、今年度は履修生が器楽のみでしたが、器楽だけでなく声楽も入るともっと多彩なアウトリーチができるのではと思いました。(音楽学領域1年 米山義則)

私は前期の授業を履修しました。授業で本格的な動画を作ることになり、今まで経験したことのない分野でクオリティの高いものを作らなければいけないのかと、とても不安になりました。

結局私は映像の編集にはほとんど関わることができなかつたのですが、素敵な仲間たちと楽しく動画を作ることができました。動画は、普段のコンサートやコンクールなどでの一発勝負とは違い何回も撮り直したり、案を練り直したりしながら作ることができ、その分、音楽はクオリティの高いものにできると思えました。映像も、編集次第で見せたいものを詰め込めるし、とても幅広い可能性があることがわかりました。しかし、わたしは生の音楽の素晴らしさはまた別物だと思っています。これからクラシックのコンサートに足を運んで頂けるお客様を増やすためにも生の音楽の素晴らしさを伝えることはとても大切なことだと思うので、直接演奏を聴いて頂ける機会がこれから増えればいいなと思います。(鍵盤楽器領域1年 阿部夏己)

私はアウトリーチの講義を、前期ですが受講しました。前期は新型コロナウイルス感染症の影響により直接病院等にお伺いすることはできませんでした。コロナ禍でもオンラインで演奏を聴いていただけるように、演奏動画の作成について学びました。それだけではなく、沼田園子先生や中村洋乃理先生といった偉大なゲストの方々からアウトリーチについての素晴らしい経験談、私たちに向けたアドバイスを聞かせていただき、充実した時間を過ごしました。演奏動画の作成は、普段人前で演奏の準備をするよりも手間がかかり、細かい調整、慣れない環境でスムーズには進みませんでした。演奏した音源は別撮りで、人の呼吸で合わせるアンサンブルは出来ず、メトロノームに合わせたアンサンブルとなったので、少し制限されたような感覚の演奏となりました。一方で、何回も撮り直し、なるべく良い物の完成を目指して何度も挑戦できるというメリットもありました。直接聴いてくださる方々の表情が見られないからこそ、多くの工夫をさせていただきました。どうしたら、上手く表現して伝えることができるか、興味を持っていただけるかという演奏する上で重要なことを、改めて前期のアウトリーチの時間に学びました。この経験を活かして、今後の直接アウトリーチで演奏させていただく機会や私自身が演奏会で演奏する機会に臨みたいのです。(弦楽器領域1年 荒川太一)

私は前期のみの履修でしたが、とても濃い授業でした。特に、動画作成においてはインターネットの接続環境が悪い中で、Zoomでの話し合いを行ったり制限のある中で練習をしたりと、うまく進まずに悩んだことも多かったです。撮影が終わった後の編集でも初めてのことでだらけだったため、思った通りにいかないことがあってもなぜそうなるかわからない、というようなことも度々あり、ひとつの動画を作るのに構

成を考える段階から撮影、編集に至るまで大変だったという記憶が強く残っています。あの動画が病院の方々にどういう形で見ていただけてどのような感想をいただいたかは知らないのですが、動画に込めた気持ちが届いていると嬉しいなと思います。

大変だったことも多かったです。今まで保育園などにお伺いして演奏する機会があった時に、この授業で何度もトレーニングしたような具体的な聴き手を想像してプログラムを考えることや、アウトリーチの経験を重ねてこられた演奏者の方々が意識していることを知るなど、今後の活動につなげられる収穫も多くありました。(弦楽器領域1年 成田萌)

私は前期の授業を履修していました。新型コロナウイルス感染症の影響で、実際に幼稚園や病院を訪問出来なかったことは少し残念に思います。しかし試作段階ではありますが、動画を撮影して施設の方々に届けるという、新しい試みに参加できたことはとても勉強になりました。

屋外で撮影した映像と演奏を組み合わせるなど、動画だからできたことも多く、アイデアの幅が広がりました。一方で、画面の中だけでは、演奏者の雰囲気や人柄などは伝わりにくく、どこか遠いことのように思えてしまいます。対象者とのコミュニケーションを取るという意味では、動画だけでは難しい部分があるのではないかと感じました。今回、どのようにしたら対象者により良いものを届けられるか試行錯誤したことは、実際に施設で演奏する際にも生かせると思います。どれも、この状況下だからできた貴重な経験でした。(弦楽器領域1年 本間京)

アートマネジメントの授業は、4年生の後期に存在を知り、大学院に合格したら必ず履修しよう！と決めていた授業でした。

晴れて大学院に進学し履修したものの、コロナ禍の真っ只中だったため、実際に現場を訪れての演奏は後期に入ってからでした。

後期の授業では、東部保育園のご厚意で子どもたちの前で演奏することができました。その時は、とうとう対面での演奏ができる！という喜びと、ヴィオラという決して派手ではない楽器で、子どもたちに受け入れてもらえるのか？不安な気持ちになったことを今でも覚えています。その思いは、当日子どもたちに会うまで消えることはありませんでした。しかしいざ演奏を始めると、子どもたちは真剣な表情で聴いてくれたのです。そんな子どもたちに、私も真剣に音楽を届けなければ！と最後まで弾ききることができました。

この一年間で、対面での演奏によるコミュニケーションは、リモート演奏や動画では体感できないと感じました。新型コロナウイルスの感染はまだまだ広がっていますが、

いつか近い距離でも音楽を楽しんでもらえるような日々になると信じ、音楽と向き合っていきたいと思います。(弦楽器領域1年 本間ちひろ)

これまでに保育園児ほどの年齢に向けた演奏会の経験は数回ありました。その時はよく知られた曲でないと伝わらないと思い、童謡集や最新の歌謡曲集を漁りました。しかし今回のアウトリーチでは、子供たちに迎合するような楽曲で遊ぶのではなく、あくまで演奏会をしに行くという目的のもとで曲を選択すること、経験の無さに時間の無さも相まって選曲には悩みました。最終的に有名なクラシックを2曲、ショーロ(ブラジルの音楽様式のひとつ)から1曲を選びました。曲に合わせたトークも完成し、数日で本番という時に、さらにチャレンジしてみたいという欲が湧きました。遊戯室での、子供たちへのコンサート。音楽を使っての対話がしたくなりました。童謡でなくても、対話の為の楽曲というのは幾らか作られています。絶対おもしろいのになぜ選ばなかったのかと後悔しました。しかし終わってみれば無用の心配でした。専用の曲を選んで様子を伺うまでもなく、曲の間、子供たちは顔をしかめたり眉を跳ね上げたり、体を揺らしたり覗き込んだりして、演奏に応じてくれました。音楽にある、言葉よりも原始的なコミュニケーションの力を強く感じる貴重な経験になりました。(管楽器領域1年 中村まり)

English Abstract

1. Artistic Outreach in Hospitals Project

Representative Satsuki Inoue
Deputy Representative Masayuki Yasuhara

Although various artistic outreach activities exist in which musicians / artists take their music / art works to show to the people who have difficulty visiting music halls and museums, the Artistic Outreach in Hospitals Project delivers music / art exclusively to hospitals and welfare facilities. Under this project, we foster the involvement of artists in high-quality artistic activities in these sites, specifically master class students majoring in fine arts and music in the graduate schools of Aichi University of the Arts (AUA).

For this purpose, we created new classes specializing in artistic activities provided in hospitals and welfare facilities, by expanding the Arts Management classes offered by the Graduate School of Music (with classes opened as Project Study courses in the Graduate School of Fine Arts) in the year 2017-18. Through these classes, students gained theoretical knowledge and practice of artistic outreach activities dedicated to children (age 2-6) in the first semester and to hospitals, etc. in the second semester, to gain know-how about these activities, and to acquire the necessary skills to plan and carry them out.

Artistic outreach activities in these places provide healing to the people, help to improve their quality of life, provide students with opportunities to experience the reality, and enable AUA to contribute to local communities.

Although the necessity of artistic activities in medical- and welfare facilities is recognized, know-how about the activities has not yet been established. Under these circumstances, the Artistic Outreach in Hospitals Project is expected to generate significant results for Aichi Prefecture as well as the rest of Japan through participating these activities at AUA.

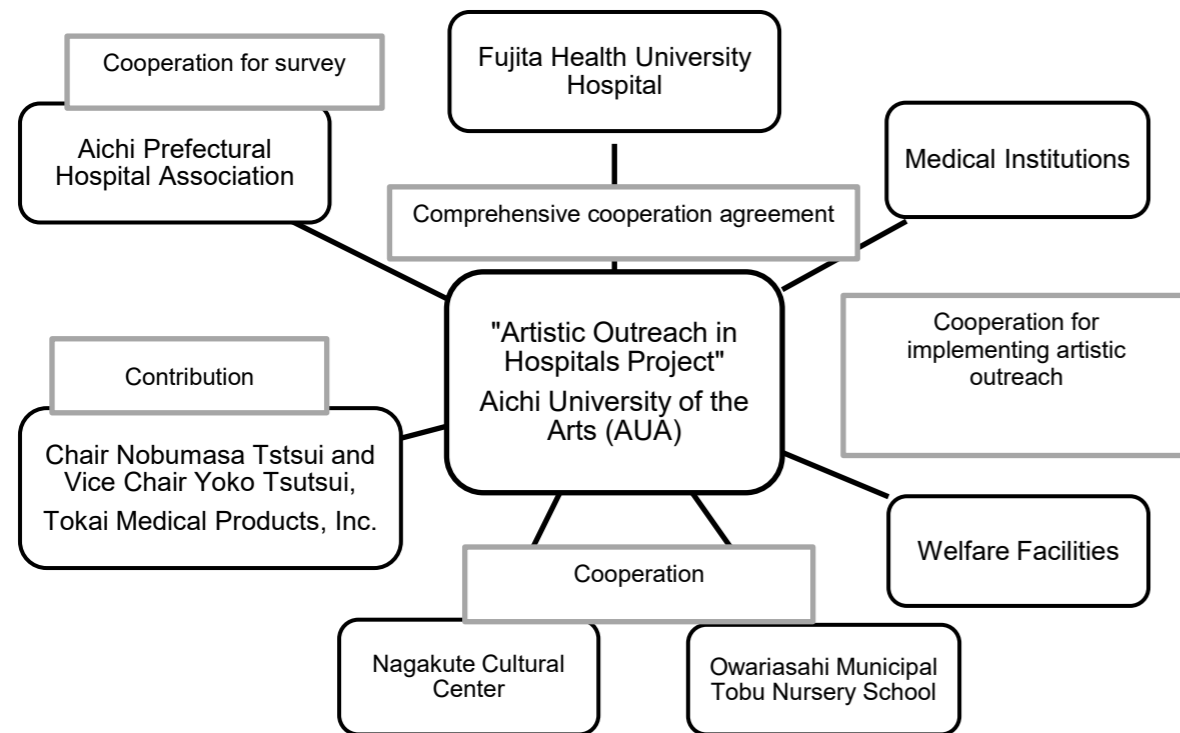
(Additional note)

Since the beginning of 2020, the COVID-19 pandemic has forced us to cancel all outreach activities aimed at delivering music performances to hospitals and welfare facilities. Under these circumstances, we began to create music performance videos as a new area of our activities. However, when we were able to hold a mini concert at a nursery school in the second semester, we realized again how wonderful outreach activities associated with live music performance really were. We will make use of these experiences for our activities in AY2021 and beyond.

2. Project Implementation Structure and Cooperative Organizations

Yoko Hata

The Artistic Outreach in Hospitals Project aims to nurture artists involved in artistic outreach activities in medical- and welfare environments, to conduct survey and research on artistic activities, and to contribute to local communities through music / art. To implement the project in the year 2020-21, we have received great support and cooperation from local medical institutions and cultural facilities, including Fujita Health University Hospital; Mr. Nobumasa Tsutsui and his wife, Mrs. Yoko Tsutsui, chair and vice chair respectively of Tokai Medical Products, Inc.; and the Nagakute Cultural Center. A simple diagram of the project implementation structure is provided below.



Project members in the year 2020-21

Representative: Satsuki Inoue (Professor at AUA; musicology)
 Deputy Representative: Masayuki Yasuhara (Professor at AUA; musicology)
 Supervisor: Ryujiro Miki (Adjunct instructor at AUA; art management)
 Adviser: Naoki Sato (Associate Professor at the Faculty of Art, AUA; design)
 Kaori Murase (Adjunct instructor at AUA; music therapy)
 Coordinator: Yukari Nakamura (Graduate of AUA; clarinetist), Takanori Ishikawa

Secretariat:

(Graduate of AUA; saxophonist), Yuya Inukai (Graduate of AUA; pianist), Yukari Kurahashi (Graduate of AUA; pianist)
 Megumi Shichijo (Adjunct instructor at AUA; musicology),
 Yoko Hata (Graduate of AUA; musicology), Muneyoshi Yamamoto
 (Doctoral student of the graduate school of AUA; musicology)

3. Contribution from Mr. and Mrs. Tsutsui (Chair and Vice Chair of Tokai Medical Products, Inc.)

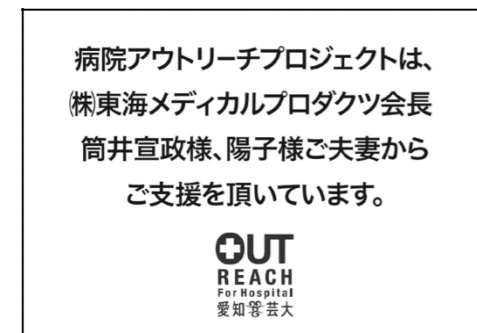
Satsuki Inoue

In the year 2017-18, we received a contribution of five million yen (approximately US\$ 50,000) from Mr. Nobumasa Tsutsui and his wife, Mrs. Yoko Tsutsui, chair and vice chair respectively of Tokai Medical Products, Inc., who agreed with the purpose of the Artistic Outreach in Hospitals Project conducted by AUA. Taking this opportunity, we would like to extend to them our sincere gratitude.

We usually use this contribution to pay rewards and/or transportation fees for players, musical instruments and equipment, and those who created leaflets for the concerts in hospitals, and so on.

We also received some valuable advice from Mrs. Yoko Tsutsui with experience tending to her second daughter, Ms. Yoshimi Tsutsui, who spent a long period in the hospital. She told us that what mattered in artistic outreach activities in hospitals was not holding luxurious concerts, but the extent to which we could satisfy and comfort art lovers in hospitals through performances.

Although, in AY2020, we were unable to hold concerts in hospitals due to the COVID-19 pandemic, through making music performance videos to distribute for inpatients and holding concerts in the Nursery School, students have developed a sense of being considerate of the audience. We intend to hold more varied forms of concerts and activities, depending on the situations in the future.



Panel put up when a concert is held in a hospital

“The Artistic Outreach in Hospitals Project has received support from Nobumasa Tsutsui and his wife, Yoko Tsutsui, chair and vice chair respectively of Tokai Medical Products, Inc.”

4. Artistic Outreach in Hospitals Project in AY2020

Masayuki Yasuhara

In AY2020, our activities in the Artistic Outreach in Hospitals Project changed drastically. A series of changes began with the cancelation of outreach programs that were planned to be performed in February and March 2020 at the end of the last academic year. Subsequently, from April to the end of AY2020, we were not able to visit any hospitals to deliver music to people there, which is the core of this project.

In AY2020, the entrance ceremony of Aichi University of the Arts, planned to be held in early April, was canceled, and classes began to be offered only as online remote classes after “Golden Week” in May, as much as a month behind schedule. Classes linked to the Artistic Outreach in Hospitals Project also began to be offered remotely via Zoom. Both teachers and students were experiencing this type of class for the very first time and often looked confused at first. However, as we became accustomed to them, we came to see the potential in online classes.

However, we faced the major issue of how to conduct outreach activities. We finally came to the conclusion that we would distribute music via video. Since almost no students had created music performance videos before, we suddenly changed the class content and invited an instructor to teach them how to create videos. Consequently, they were able to create a prototype music performance video.

By the time the second semester began in late September, the social situation of COVID-19 had changed slightly. Some classes began to be offered face-to-face in the second semester. It also became possible to conduct outreach activities at a nursery school, which had been implemented in the first semester in the past. In December, three student groups were able to visit the nursery school to perform live. That was a precious experience for them to realize again the pleasure of performing music in front of an audience and the significance of communication through music between performers and the audience.

From the beginning of 2021, we began the full-fledged creation of music performance videos. Since Fujita Health University Hospital, one of the places we have visited for outreach activities under the project, is a medical institution in the forefront of fighting COVID-19, we do not know at this time when we will be able to resume outreach activities there. Accordingly, we are proceeding with the creation of videos so that we can distribute our music performances as soon as possible.

Although we have been significantly affected by the COVID-19 pandemic throughout the year, there has been much to learn. We will make use of what we have experienced this academic year for our outreach activities in the future.

5. List of Artistic Outreach Activities in AY 2020

Takanori Ishikawa / Yoko Hata

List of Artistic Outreach Activities in AY 2020

Public performance No.	Date of performance	Venue Project title	Targets Performers [Note 1]	Performance time (min.)	No. of participants (persons)	No. of staff members (persons) [Note 2]
1	December 9, 2020	Tobu Nursery School (Owariasahi) Interacting with children through music (4 performances for toddlers, 3-year-olds, 4-year-olds, and 5-year-olds)	Nursery school children / Childcarers <u>Yuka Iwahashi</u> (piano), <u>Mari Nakamura</u> (flute), <u>Yoshinori Yoneyama</u> (narration)	15	24	2
2				15	20	
3				15	28	
4				15	25	
5	December 23, 2020	Tobu Nursery School (Owariasahi) Providing an opportunity for children to listen to music from various countries (4 performances for toddlers, 3-year-olds, 4-year-olds, and 5-year-olds)	Nursery school children / Childcarers <u>Chihiro Homma</u> (viola), <u>Risako Watanabe</u> (piano), Yoko Hata* (dance)	20	24	3
6				20	20	
7				20	28	
8				20	25	
9	December 24, 2020	Tobu Nursery School (Owariasahi) Providing an opportunity for children to enjoy the sound of musical instruments (4 performances for toddlers, 3-year-olds, 4-year-olds, and 5-year-olds)	Nursery school children / Childcarers <u>Minami Tanigawa</u> (piano, keyboard harmonica), <u>Nanako Nishimae</u> (clarinet)	15	24	2
10				15	20	
11				15	28	
12				15	25	
Total					291	

* As of February 18, 2021

[Note 1] The underlined persons are students involved in the project in AY2021 and AY2020. The person marked with * is the project staff member.

[Note 2] The number of staff members includes only those involved in the Artistic Outreach in Hospitals Project and does not include those working at the nursery school.

Communication with Meijo Hospital and Shirayama Rehabilitation Hospital

Medical institutions most strongly feel a sense of crisis regarding COVID-19 from the perspective of preventing its spread. Every hospital that we had visited under the Artistic Outreach in Hospitals Project was quick to take measures against the COVID-19 pandemic. During the period when the measures were most strongly enforced, family visits were banned, and no one, including even hospital volunteer members, other than outside traders was allowed to enter the hospital. Under these circumstances, we received words of encouragement from every hospital, saying that it wanted us to encourage people with the power of art even in such hard times. Although we were unable to hold face-to-face concerts as usual, we are staying in communication with Meijo Hospital and Shirayama Rehabilitation Hospital so that we can jointly organize a concert when the COVID-19 pandemic has ended. (Takanori Ishikawa)

愛知県立芸術大学「病院アウトリーチプロジェクト」

2020 年度報告書

2021 年 3 月 31 日発行

編集・発行 愛知県立芸術大学「病院アウトリーチプロジェクト」委員会

〒480-1194

愛知県長久手市岩作三ヶ峯 1-114

愛知県立芸術大学 井上研究室

TEL: 0561-76-2563 FAX: 0561-62-0083

E-mail: outreach@mail.aichi-fam-u.ac.jp

印刷 株式会社ウエルオン

〒464-0858

名古屋市千種区千種 2 丁目 1 番 28 号

TEL: 052-732-2227 FAX: 052-733-3178

URL: <http://www.well-on.co.jp/>

